里見八犬傳

拾八編

四十七上

13
3416
98

13
3416
96

十八番

南總里見八犬傳第九輯巻之四十七

東都　曲亭主人編次

第百七十八回　有種恥を雪く郷黨を復帰せ、大水陸ふ衆鬼を濟度す

是より先ふ犬山道節忠與ゑ。十二月八日の黄昏時候河嵜矢口の間河原ふて定正の援兵ゑる。巨田助友を擊走らせ折。印東明相荒川清英等の意見ふ任せて。故の海邊ふ退く程ふ。馬淵場九郎が残兵及近郷ゑる。豪民の子弟毎が。多く走至加りて。既ふ多勢ふ做りくゝるべ。姑且其里ふ人馬を憩へく。且當晩間諜児をゝて。五十子の城の虚実を覘せ。ふ。那里ハ夙く犬阪毛野が。江を渡ー来つ城を拔て。威勢正ふ破竹の像く。當家の旗を四門ふ建て。紛ふべくもあらぬとゝ。道節聞て且歓び且羞く。明相清秀等ふ。ゆう。安ね又智裏が逸早く。

五十子の城を攻落さう。有徒まべ我い大石ゲ大塚の城を拔色く。忍岡の城をも捕るべ。疾打立ねといそぐして。人ふい飽まで戰飯を使ぜ。馬ぬい多く豆草を飼そ。九月の曉天ふ河嵜ある海畔を立く。陸地より。菅弘大塚を投て推寄る。其兵新舊うち合して。三千餘名ふ及びけ。佶而犬山道節い大塚の城ふ近づく程ふ。先一二騎の斥候を遣して。敵の形勢を知まくもるふ。其兵毎かへり来て。那里の城い。徳方の士卒入替てゐ守ゆん。建うる當家の旌旗戰幟多くつえくいと報しうべ。道節ち。騎うる馬を駐めて呆るゆ半晌許。原来ふ智裏ゲ那里乃城をも捕うよ然べとて這里まで来るぐ。城を守ふ頭人等に。對面せびいあべうぎ。さてもぐどろうふ。我ぬ馬ふ鞭うちて。既ふ其城門ふ近づく隨ふ。軈て一両個の士卒を走らせく。城の頭人ふ告しうぐ。小森但一郎高宗木曾三介季元等い其虛実を問糾をふ。疑ふべくもわゝざまべ。隨即門戸を開ゆ。道節をぞ迎へる。

當下犬山道節い三千の隊の兵を。开グ儘大塚の城外ふ住め在らせて。那身い明相清英と。僅ふ三騎士卒百名許を將く。城ふ入く高宗季元等ょ對面して。當城を攻落しうる。其敏捷を誉て且敵の落方を尋るふ。高宗季元ゲいとう咱等い昨宵犬阪主の指揮ふよりて一千許の隊兵を將て。當城ふうも向ひ。這里城守る大石ゲ士卒等い管領昨日の水戰ふうも負けて。落く其往方を知らぎ。剩王十子の城い犬阪ふ逆寄せうまて。没落ちといふよりと。當城の頭人友橋雜記丁田畔四郎等ゆ知ゐて。然でい這城保ちがさう。敵ふ逆寄せうまぬ間ふ。忍岡へ退きて。那里と一隊と做らむとて。雜記い主の大石ゲ宅眷ふ己ゲ妻孥を相添して。第一番ふ城を落しうべ丁田畔四郎い三四百の士卒と俱ふ。各資財什物を或ち車ふ載或ち馬ふ駝して。後門より出去程ふ。我们夙く推寄来く。咄と嘩ぎく攻撃しうべ。然らでも皆是怯鬼ふ。誘引れぬる城兵等い孰ち拄一拄

文溪堂藏

拄べ。口ハ雛蟻を散さぐ像く。逃く四令ハ落ル做さしべ。我们も手も濡さ忍當城を獲て守るのこと勿論那義ハ生拘の。敵兵ハ皆く所ゐり。と告る彼うち所く明相清英憶ぢもうち合英れて事の便宜と犬阪の軍略智計て感嘆ぢ幷が中ル道節ハ連りル耳を欹けて。笑果て且つ曰。現ル兵ゐ拙速を貴ぶべし。久くゐて巧るゐを良とせば。犬阪ぐ為ゐ所い速ルして拙かゐぢ。咱等ハ昨宵愁ル中途より走加てぬる。兵毎ル拘つらひて。時後とぬる悔しさよ。然らんよハ忍岡をも。亦犬阪ル先せれ欲といふを高宗推禁めて。否さよ。忍岡の城攻の事ハも。昨宵咱等ぐ薦めしかども。犬阪主從ぢぢ。那里ハ和君ル譲らんとて。士卒玆紛けて伐せゐいぢ。然れば亦五十子と。這城内ゐる落武者の咸忍岡へや集合け。然らば那里ハ大勢ゐるんと。告るを道節笑ゐぢ。好々我ゐろゐる。暇まうきと身を起せば。明相と清英ゐ。又高宗と季元等ル別と玆告て相從ふを。留め難ゐる高宗季元猶も太向の小心を顧ゐくことをとゐろル。門内までぞ送りゐる。然れば亦犬山道節ゐ。大塚の城を退ぢ出ると幷ぐ儘老兵士卒に意衷を示して。犬阪既ル忍岡の城攻を。咱等ル譲らんといふ。縱那城五十子大塚の落武者等ぐ加りて。幾千幾萬人盾篭りて防戰ふとも。今日我一時ル踏潰さん各粉骨摧身して。我を佐けて大功を做しね。卒らくといそぐせば明相清英いべ。ぢゐ士卒咸諾して。勇ミて其隊配ル相從ふ明相清英先鋒ゐ。道節ハ中軍ゐて。二の老兵ル頭人を後陣とも。隊伍齊々整々と。不忍の池の那方ゐる。忍岡の城を投ゐ。高ル當門湯島の間ゐ。森々ゐる岡山ゐて。処々ル繁り柱ゐる冬青樹ル路を太まぢ。既ルして犬山ぐ一軍ハ湯島ぢ過らんと。ゐぬる時。道節ハ馬上ゐ。去向を佐と見且して。急ル先鋒の士卒們を喚止めて。且宣示ゐく。我今前面の茂林を。ゐるル正ハ是隱々として。立升ゐ殺氣ゐり。意ふル敵の伏兵ゐん疾猶出て撃

捕りねと誨る詞も果ぬ折ふし。件の茂林より忽焉と咸聲大く發りて。撃出す火銃の。煙と俱ふ顕まる。敵兵約一千有餘真ふ找む其隊の頭人烏革縅の鎧ふ同織の五枚首甲の火形打ちを猪頭ふ被做し。腰ふ大小二口の刀を跨へ。馬を跳せ錦を拈て四下ふ呵く聲高やふ里見の葉武者们胆を潰して。翁谷殿の御内史。忍岡の城の頭人根角谷中二麗廉這隊ふ在り。先度の恥を雪まくと本事をうんよやと喚れい左右ふ從ふ面個の小頭人赤耳九二郎當場阿太郎。士卒を駈く三七二十ふ殺頽さんと競ふ蒐まば。明相清英毫とも誤ず。徐々として士卒を找めて。中を割せず左右をも撃せず。道節も亦是を助けて。息をも養ず。挑戦ふ左右の茂林の方ようて又起り立二隊の軍兵笹田馭蘭二韭見利金太布留川浅市甲乙三騎其兵約莫一千許道節ぐ備の真中へ咄と嘯く推蒐るを。道節誤ぐず用ゐ合せて。右ふ弓受け左ふ拄て士卒を使ふふ脚の像く。毫も透間あるとるけまば。明相と清英は是ふ氣を沼くふを推く。鬨戰闌るる折ふ。後陣のかふふ又敵あり。是則別人ふぐ。大塚の城の頭人反橋雑記丁田畔四郎ぐ其隊の残兵四五百名を。直先ふ找めて。犬山の後陣を撃て急ふりければ。道節ぐ其隊の老兵小頭人も皆駭ぬ慌て返し合ふふ暇ふく。這隊ふ。ふて敗れしまば。是ふぞ敵ふ威勢をうて。前後左右揉合せて。漏さずふぞ攻戰ふ鋒尖鋭かるる。道節ふ物ともせず。馬を前後ふ馳融し。又只左右ふ相中りて。鎗もて敵を刺仆も。武藝驍勇向ふふ前ふ一人當千。いえでも有る。犬士ふ誰ふ克つ者あらん。箕田馭蘭二韭見利金太憶ぞも辟易ふて俱ふ深痍を負しまば。其隊の兵们潑と頽れて風ふ木の葉の散る像く。鋒を倒ふて逃しまば。道節も又奮然と後陣の敵ふ突蒐る。本事ふ做ふ老兵小頭人取て返しつ刀を勁せて皆只恥を雪んと。思ふぬ者もるる。勢ふ反橋一田ぐ五百の士卒ふ。要時ふぞ恥難て逃んと。ふて度て失ふて。撃る者ぞ多りる。然ば又印

東明相荒川清英が這時まで根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等の一隊と挑戰ふ程ふ左右後陣の敵兵を咸道節ふ撃破られて立脚もなく敗りしぶ敵の頭人谷中二九三郎士卒も俱ふ驚怕まて呼と叫びや敗れ走るを明相と清英ハ隊兵を駈く攻伏々々明相ハ根角谷中二ふ鎗を合せを痍して馬より撞と突落ま其間ふ荒川清英を赤耳九二郎て刺イ。又當場阿太郎ふを痍して猶も雙て敵撃這壯佼等の挿ふ躬方ハ勇こて後れんとを怕ま敵ハ影を躲し迹を埋る野戰風く果しぶ道節ハ开ゞ儘ふ馬を樹下ふ騎居て士卒の集合ふ伏候程ふ東明相荒川清英を生口根角谷中二を雑兵ふ牽せ来て其の餘敵の小頭人赤耳九二郎當場阿太郎とを喚做を兵毎ハ深痍ふ堪ず死くまぶ其首を捕ぎと云又道節ゞ隊ふ生拘る其田駅蘭二ハよも深痍ふてあいるを以ぞ非見利金太布留川浅市友橋雑記丁田畔四郎等ハ或ハ撃れ或ハ逃亡て敵一人もあぶらるぬ當下

道節を。明相清英等ゞ今日の挿きを誓て且ハ必ず我聞箕田駅蘭二ハ是五十子の城の留守居るゝ又友橋雑記丁田畔四郎ハ是大石ゞ兵頭ふて逃く大塚より来たるゝ又根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等ハ則忍岡の頭人こ然るを五十子大塚の城の落武者等ゞ谷中二と一隊ふ做りて我を中途ふ撃まくせい所以あるべをを猶よく思ふふ谷中二ハ間諜をりて我去向を予知りて悄地ふ城を出て這頭ふ埋伏して我を撃まくゝ欲する程ふ駅蘭二雑記等ゞ西城の落武者毎ハ料らむ其首ふ落合て却大勢ふ做りたるゝんとゝ明相然こと答へく現ふ推考然もいハゆ愚按ふハ敵の遺せ雄旗戰幟あれば开をゝ根角谷中二ゞかゝり来ぬと伴アて忍岡の城ふ造らべ城兵必欺まく城門を開ゝ吾を容れんとゝ清英もの義喜こ登時我ゞ先ふ找こをふ無して城を捕べいそゞせめと萬まべ道節頭とゝ揮て其計畧を知ふあらねど根角ゞ残兵脱還らべ城兵

道節
三城の残兵を破る

蝕く我詭詐を知らん且野干王の烏夜ゐるべ其計畧行はるもせめ。非如敵の旌旗
戰幟の。揣らまく欲するとも。今這白晝に城ゐ莅まべ面善児のゐる故よ城兵
必疑ふべ。然危き技をせんより。今谷中二駅蘭二ゐて。明明地ゐ曳吊ゐ見せて
城兵ゐを罵て權さば。城兵必害怕まく。我ゐ降らん。倘又城ゐ猛者ありて防戰まく
欲するゐ。筋力をのゑ是を捕らん外ゐ援のゐる城を踏潰まゐの障没むや。卒
やく。一ゑ馬を找れば。明相清英この議ゐ任して。既ゐ半生半死ゐる。谷中二と駅北蘭
二ゐを。雜兵ゐ吊らせ先ゐ立く。明相清英先鋒う。道節も推續ゐく。三千の從兵
前後を乱さで。既ゐて忍岡の城ゐ迫づゑ来ゐる程ゐ。ゑ人まべ正門の堞の内城樓
の下ゐ中黑及揚羽の蝶の花號染做る。旌旗騎馬表を幾流り建るゐ寒ゑ西北
の風のまゐく。翩翻る光景ゐ他ハ甚麽とだるゐ明相清英ゐべさらと。道節
並ゐ從兵們も眉を顰めゐ疑惑ふて思ひ難る并ゐ中ゐ。道節ハ人をゐて。明相

清英ゐいとまろゆう。今這忍岡の城ゐ躬方の旌旗を建るハ只是我を惑る敵
の計策ゐるゐ。然ゐハ亦智王ゐ薄情や我を脱し技きゑ風く這城をも攻捕るゐ且
城ゐ向て名告喚りて那虚実を覘ふべ。といふ明相清英ゐゐゑ馬を正門の橋近く騎
找めて聲高やゐ喚るゆう。やゑ城内の人々ゐあいゑ。這城の頭人ハ敵欲躬方欲ゐろ
ゐめ。我ハ里見の防禦小頭人印東小六明相荒川太郎一郎清英是ゑ這隊の防禦使
犬山道節主の武勇をのゑ。方僅来ゐる中途ゐく。當城の頭人根角谷中二及五十子の城の
頭人箕田駅蘭二ゐと戰ふく。且病負せて生拘りゑを牽せ来て這里ゐ在り。門戸開て
迎へまゐ。と繰返ゑ呼ばば城兵ゐゐハ心と答て先挾憑を開きゐ。左見右見ゐ半晌
許躊て城門を開せく。頭人とおぼゐゑ武者。葱白絨の鎧ゐ鰲鉄打る釘媿頭の脛衣
穿て。紋短ゐ締做。黄金製作の大刀を佩て。頭鎧を從者ゐ持せるゐ。士卒二十名許を
從へて遽く出て来つ。ゐるゐ名告答るゆう。大山主ハ那里ゐ在る。恁ゐの我ハ落魄餘之

七有種ハいてゐぞと報知せて近づく程ハ明相と清英ハ隊ヲ知ふ那人欲思ひけぞと
だありふ引て道節ハ逢されが。道節ハ遠ざく馬より内りと下立て。おの〻落鮎生一別
以来こ第。和殿ハ亦幾の間ハ當城と攻落ーたる。料らざりゐる對面ハこそ其所以きま
わーけまと。向ハ有種さい小可グ出没ハ言一朝ハ聲ーくこゐ。先城内ハ俱ーたらん人馬を
憩ハ〻ひねと答て却明相清英ハ名對面ゐ労ふて引て城中ハ請されば道節ハ明
相清英ハと俱ハ找ハ入る程ハ自餘の老兵小頭人们ハ士卒を徐ハ繰入まて三隊ハ別
れ東西ハ聚ひて乱雑ゐるーゐ。偖而落鮎有種ハ道節及明相清英ハを誘引て
城の正廳ハ造る程ハ五十有餘の法師武者と落鮎の家の老僕小ヰ二と穂北の故
老们出迎へ〻上座ハ請待ゐ。賓主の席定りて孚炎の火盤を薦め且前茶を看ゐる
どを。當下道節ハ有種ハうち向ひて。昨日洲嵜の澳の水戰ハ大阪グ計畧をゐて大
敵を屈ハ来けるゐの始ゆゐ。道節グ敵の副將朝寧を射て水中ハ隊ーゐ。又

河嵜河原ハて定正を赶殺ーー時巨田助友グ援兵のゐ又ゐ〻来ぬる時湯島ゐる
岡山ハて。根角谷中二箕田駅蘭二友橋雑記ゐの三城の合兵と鬪戰克て。谷中二駅
蘭二ゐを生拘て。牽ひて来ゐゐの終りまて其大畧を説示ーて。却落鮎グ上を向ハ。
有種ハ〻ゐ毎ハ感歎せどとのをゐ。義成の武徳仁政二犬士の才畧武勇を誉ゐ
ゐ大方ゐ〻ぞ。小可グ上ハゐ。首を〻ゐ箇様々々尾ハ又徒々做りとて言詳ハ説出せ城。
道節明相清英ハ齊一耳を敢て。俱ハ佳境ハ入りゐる。其顛末を尋ぬるハ初落
鮎有種ハ翁谷の討隊の頭人箕田駅蘭二と根角谷中二グ弓勢を領さゐ。ち向ふと
〻へ一時妻の重戸グ諫ハよりて。急を郷黨ハ告知せて穂北の家を自焼ゐ。郷人を咸
相伴ふて重戸の叔父のいまをかりけ。下總の國猴嶋郡。誼夾院村ハ赴さて那小
父ハ危窮を告て權且這里ハ潛びて居り。抑當村ハ誼夾院と喚做ーゐ一座の
修験院ありけり。住持ハ豪荊とのふ山伏ゐ昔ハ子院四十八ケ寺ゐ〻ハ近世痛く

衰て今は本山のこゝろれども。其餘波近郷に在り。皆半僧半俗なく武藝を好こと且各々耕し耘りて。口を餬へども。尚本山に事ある時は四十八院咸集ひて相資けぎといへとも。況て豪荊法印は其性物に任侠にして。法師に似げなく脆扱なれば平生に弱を助け。強き徒折を人の不平を解まくを然れば今落魄夫婦が寃家の為に地を棄家を焼て宅眷を携へ郷黨を相伴ふて。悄地にあちこに尋ね来つ。事の難義を告知せく。其資助を憑まゝ。豪荊は推辭氣色なく。最精悍く管待く落魄の宅眷はちこと穂北の郷人開ぐ妻妾子弟まで西東に潛せ。よく是を舎藏て五六旬に倣り。比忽地羽谷定正の里見を攻伐のみ企て。内顕定と両旗に且諸侯を連ね兵を合せて水陸よりうち向ふと云大兵約莫十萬餘騎陸は行徳國府臺水路は安房の洲嵜を投て攻寄ると風聲あり。其言葉浪ならざれば省種々驚き怠ひて。悄地に法印豪荊に意衷を示して談ずるやう。里見殿は曩に我義父氷垣夏行翁の老病に臥し折。東西賜ふる恩惠あり。然らども彼は犬士は咱ら幸に一面の交を辱くせ。開ぐ中に犬山道節忠與は原是煉馬の残黨なれば。我舊君。豊嶋殿と同宗の家臣なりしの故に曩には那犬士の母幾番か我に薦めて里見に仕へよといへれども。其比は氷垣翁の老病を看故ちづて。且公羽が兩發相傳の田園を棄て他郷に移らんの本意なく。いまだ果さぢりけるに幾程も禍鬼起りて。穂北を棄て走る時いで安房に赴きて。犬士に就て里見殿に仕へと。人のいひけるは然しも一介の功もなきに身の措処あらばこそ。安房へいかさまぢみて竟に這地に来つるなり。今里見殿に大敵あり。危窮存亡の秋と聞なば。報恩は義に及ばぢは勇士の本意とぞ。いざ身一臂の力を勠して我を帮助て軍功を立ることを沐させよ。其功をもて里見殿に仕へ二心家を起さん。這義誰何と請問へば豪荊はつらくと。听々莞然とうち笑く和殿の情願極て佳。里見殿は賢君に且仁政の

ゆえわり。和殿ふの折ごとに。義旗を揚るべ名あり忠あり。我いろふ〻に帮助ざるや。
先間諜児をして。寄隊の来方を探るべく。子院の甲乙穂北の郷人を召集へて。他ざるが
意見を安べしとて。次の日件の毎を招鳩めて。かの美を告て意見を問ふに。大家死をのも
資んとて。各神水を啜り誓を為り。悄々地ふ軍陣の准備を做む程ふ。十二月の初旬ふ
なりぬ。その時蒙荊ゞ遣したる間諜児かへり来て。寄隊の来方を報るを。ゆくゆく陸
地へ。國府臺へうち向ふ寄隊両大将ゆく如此々ゝ。又里見方へ義通君を大将ゆく。
犬塚犬飼防禦使さう。又行徳日へ如此々ゝ。洲崎へ箇様々々と三所両敵の六名を
ゆぬる隨ふ報ふり。登時有種へ蒙荊们ふ談ずるゆう。今我義旗勤軍の届る
所洲崎へ路遥ふして。事の急ふ逢ひぬさう。行徳國府臺へ便路ふて且遠ざるど
就中國府臺へ寄隊數萬の大軍ふて。頭定成氏両将ざるど。況ず里見方へ義通
君大将ふて。犬塚犬飼防禦使ゆべ。這隊ふ就て軍中を盡さん。然へして事をいとゞ

ざるふ。不慮の軍陣ざる故ふ。左ふ右ふ東西整ゝ思ふも似ず日を過へ。十二月八日の早天ふ。
有種并ふ法印蒙荊を両頭人ふて。四十八院の山伏穂北の郷黨ゞゞ子弟ふ至はまゝ。
壯ざる者二百五六十名。甲冑器械へ筵席ふ裏こみどざる。各々是を搭駝て國府臺を
投ずいそぐべきう。路近かるねば時移りて。その日申の左側ふ國府臺の近村ふ来ゝゆふ
隔昨日ざりの鬨戰ふ寄隊へ酷くうち負ず。今日も内許我の両将へ落たる狡駿れ
なる狡敵へ一人もあるどざりぬ。但里見の防禦使へいまゞ常城ふ久り来ふ。其言疑ゝ
ざるふ。有種蒙荊へいふ。這隊の僧俗忽地ふ望を失ひ呆れ果ていふ。ぜまりと
うち相譚ふ。有種一霎時沉吟して。鬨戰既ふ事果て。今ぢう城ふ参るべ鄙語云鬨
詩の後の棒三昧。只胡慮ふ做らんのを困て憶ふ寄隊酷くうち負て。往方も知ず
做りしとへば。約莫豊嶋ふ在る所の敵の城へ士卒咸耳怕して。脱路を見るべ。就中
忍岡の城の頭へ我郷黨の怨ある。根角谷中二麗廉ざるゞ。他へ貪やく飽ざるく。

罪を虐げて罪ある人を殺すこと大魚の細鱗を吞ぐ如く。其惡筭田馭蘭二と伯仲也。若今宵那城を攻落して、谷中二を生拘べ大塚石濱の両城い攻ざるも必落んものを。何什麼と請問へば。大家ひちく諾みて。斉ら究竟の使直ありぬ。然らばいそげと矢砺の河も。宮門河をもうち渡りて不忍の池の畔ゐ来ぬる程ゐ。夜い丑三ゐ做りぬべし。酷く走りーとるはば。寒夜も皆汗ゐ沼堪ぞ。端を止めて這里那里ゐ立休ゐ又相譚ふゐ。豪荊聲を悄りて。今這小兵をのて城を拔まく欲まるゐ。竹肋力をのて勝を取かさうゐ。只詭の計ゐ考てとるべし。其計策い箇様々々と詞急迫しく呼ゐ示せば。有種自餘の僧俗も。ゆく者欲ざるいるく。甲ゐ仍くひゐ仍くく。大家其意を沼さうーゐ。有種豪荊。ゆべさうこ躬方の僧俗三百五六十名。搭駝来るる筵裏をまむゆく各鮮披ゐ。武器ゐ身を固め。大刀を跨器械を携て。齊一脚を乱ゐ。走りて忍岡の正門ゐ造りく。城門を敲ゐつ聲震立て。やをまこ城内の人々誰うゐる。今日の鬪戰利

あゐぎーて。行德并ゐ國府臺ゐ總領まゐ做りーゐ。御方の士卒幾千名欽陳沒ゐ。なる開ぐ中ゐ。佞曹司朝良い辛ゐ一方を殺啓きて。目今當城ゐ渡らせるうゐ。ちうく迎奉らぎゆ。と繰返ーゐいそがあけりゐ。その時這忍岡の城兵ゐ行德ゐ寄隊の士卒幾名欽方僅あゐ脫れ来て。寄隊敗軍の為体。朝良い辛くて近習の士ゐ資られて。両國河原の方ゐ落さ者ゐ。御往方を知ぎとゐ。城兵是ゐ驚騷だて。頭人根角谷中二ゐ告知せ。兵頭當場阿太郎。赤耳九二郎。小頭人宍栗專作。ちうち集合て。谷中二ゐ。里見の兵士を勝ゐ来て。當城ゐ逆寄せ人まゐぬ這城ゐて。防戰ぞも幾まぞう。拄べ。所詮敵の旗の見えぬ間ゐ宅眷を穂北の別荘へ落ー遣りて後易ーく進退せんと。猛可ゐ城内ゐる婦幼ゐ。老兵を隷ゐどーて。悄地ゐ後ーゐ。ゆ遣りけゐ。事慌ゐ。折ゐゐ。今又定正の嫡子朝良の敗績ゐて。行德ゐ脫ーて來ぬると。ゆく者誰ゐ驚ぎん。慌て城門を開むとせーを。這隊の小頭人宍栗專作。吐嗟とぞう。推禁めて笞ね

兵毎非如御曹司の渡らせのよとの。野干王の夜ふ甚麽ぞやいまぞ虚実を質さばーく大門を開くべきある。先御曹司と二の近習と容まゐらせて後ふと。御伴當と饒べげれ。角門よりなくと下知ふ門子応をまつ。卒先郎君入らせのとい入て開く角門より。衝入る者々別人なるぞ。落鮎餘之七有種と。誼夾院の住持法印豪荊及其徒弟両個の勇僧突面坊豪的師椀坊豪菩と喚做しる。武勇剣法賞ある。四人齊一腰力を抜くるの見甚守門の雑兵四五人所仆しと返を刃ふ専作ゞ片腕托地と釘かけて斫られと苦と叫びも果ぞ。

警居ふ撞と平張けり。是ふぞ駭怕る衆兵敵あり敵あり。と喚りて逃るを透さば走蒐。斫仆ーー又斫散を其間ふ外面る。僧俗二百五六十名ゞ用門より。稠入々々豫て准備ふ猟来る。中黒の旗豊島の旗を九尺柄の鎗尖ふ結附く。突と推建ゞ聲高やふ里見の防禦使犬川犬田ぶ。先鋒の頭人落鮎有種ふ在り。新附の修験者誼夾院豪荊ふ在り。と名告被け相喚りて三の城門投て攻入る程ふ根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎老兵頭人既ふ皆鬼胎を抱きて宅眷を落せー折るふ果ーて敵ハ逆寄ふて犬川犬田落鮎ゐど。咸城内ふ攻入りけ。名告諸聲ゆえーよう。いよく驚駭ゆもく怕ゆて拄一拄も防ぎふぞ良核の喚子ふ群鳥の發と立ッ像く後門より。辟を突て逃出れば城兵約莫一千有餘勇ゆ雲霞推並てうち續ゆて逃去りけ。然バ落鮎有種ハ思ふ思も似ぞ城兵の脆くて骨を折ゆぞもの。今立地ふ怨を復しと會稽の恥を雪めーんべ豪荊と俱ふ躬方の僧俗を勞ふて撃捕る所の敵兵を実検ゆふ當城の小頭人穴栗專作を首ゆて力瘡児死人七十名とれあるのこ。這餘ハ皆悉落亡て一時ふ城を獲ゆけ。ゆゞ中に穴栗專作ハ深疵ゆれども未ぞ死ゆぞ。他ハ根角谷中二箕田駅蘭二名と同悪ゆて民を虐げて非義を恣よゆる好賊ゆれべゆぶ儘緊ーく結丑せく旦城内を展検ゆる婦幼も遺る者ゆく米粟尤多くあり。軈て四門を守らせく却牢舎ふ。世智介并ふ梨八夫婦及穂北の隣村る。荘客と其妻子弟悉。罪ゆくて縛捕れる者三三十名を扶出ゆふ他ハ久ーく禁獄せ枝。且呵責の告ふ堪ざる

けるに、皆半死半生なりしうど。幸に命恙なければ、有種豪荊勦り慰めて、准備の薬を與へるに、皆閑室に臥せて、火をもて那身を温めるに、世智介梨八夫婦はさらに其毎推るべく。陸獄の餓鬼が佛菩薩の救ひを得る心地して、皆感涙を落さぬ者なかりけり。扨中に世智介は曩に小才二と共侶に主の密使に立て時梨許に寄ると。酒乱に己を忘れて那禍鬼を惹出せしより、落魄一家隣村の荘客まで其餘殃に遇せる。罪軽からぬわるねども、只是一時の口過にて、素より悪意ある者なれば有種今々深くも憎まず。口其以後を警懲して、療養餘の人に異なるねば世智介は且怕と且感服まで。聲を呑て泣に、介程に根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等は一千の城兵あり。るべく。防戦に心を慌て城を逃去るめるに、又よく思へば後難の怕れあり。徑に五十子の城に参りて、箕田駆蘭二等に力を勠して。那里に敵を待んと。其方を投て行程に又那箕田駆蘭二も。大阪毛野亂智に鈍くも城を攻落されて、聞見利金太布留川浅市等と

俱に城兵多く従へる。這方を投て来ぬるに逢ひけり。又只是のみにあらず大塚の城の頭人。反橋雑記丁田畔四郎等は主の宅眷に相俱して城を落て来ぬ。谷中二は欺くと今這二隊の幇助を借りていざ又忍岡の城を奪復さんとて。駆蘭二雑記等に商量する。雑記も亦人の誘を好まで。然は俱しる女性達を、五十人の城に遣して後安く做さんとて主の憲重憲儀の妻子と己等が宅眷ゆい老兵八九名を従せて。那里へと落し遣程に。但見に西北のくさよりして来る一隊の敵兵あり。其頭人は正に是大山道節忠與なるを。谷中駆蘭二雑記等は夢にも知ぬ。只是烏合の野武士等が御方の敗軍を伝知りて。或は落人を剥畧べく。或は城を攻破りて不義の利を欲するなり。先那奴們を撃捕りて其威勢に乗じて。忍岡の城を奪復さんとて。三隊を分ちて四所に埋伏をなすに。道節明相清英等に撃破られて。剰駆蘭二谷中二は生拘られて。這里に牽来る。利金太浅市雑記畔四郎等は其隊の毎共侶に撃れて狭逃る狭存亡知ぬ做りしに。然ば

今落點有種が大山道節が解知せぬ。那身の来方豪荊が義侠及當城を攻落し
ぬるまの顛末又生口の敵兵の招ぎ知られる根角谷中二葉田駄蘭二反橋雑記
落合しまで都て上の如くがわれが道節は毎が感歎の聲を沿断に為が貌を
改めて有種が向ひていまう思ふが優る和殿の武畧豪荊法印の義侠胆勇多く
ぬぐ美談る哉就て這生口駄蘭二谷中二専作も年来其君を惑して栄利を
欲り。那民を虐けく罪るを害まるも勘くまと考えう。然が今番定正が説薦
めて。吾名の軍を起させて人をも身をも喪ふは皆是這奴们群小の致す所と我が異晋
安房牽もて参らば亦是館義成の御仁心ゆく肯免わるも知るべくば今速が誅せ
ざ。何をかよく勸懲を正さん。權且牢獄が係ぎ置く明日は剣が行ふべしと敦園
猛く罵示せば。隊の兵毎阿と応て谷中二駄蘭二専作を俱が牽立く退出けり。
偖而大山道節は這地のまの趣と落點有種のまを。洲崎の御陣へ注進まべく。

犬阪も示し合せんとて。躯く呈書一通と。毛野が與ふる手簡さへ遣るく自書寫めて心
利ある士卒四五名が事偖々と分付て件の書翰を齎まつ先五十子の城が造りて犬阪が別談
るくは水路を洲崎へ参れとて。そゞ立てぞ遣しけ。偖而次の日這豊嶋郡るを壮客百十
數名穂北の隣村るる者毎を先が立く忍岡の城が来て道節が訴るまう。今番生拘せ
るはるる其田駄蘭二根角谷中二宍栗専作は我们が親兄弟の寃家がていへばいで那身を
賜りて斫切て亡人の怨を復く欲しはの我を許させはいねしと異口同揉が願ふが。
道節听て領きて現が然もわるむ。今這時が民の寃を解ぎもわるが善悪応報の天理
空しが似ぬる。他们が情願が任せよとて隨即駄蘭二谷中二専作を牢舎より出さ
せて。其莊客们が合らまるが撿使の士卒を遣るしば大家都く歓び勇ぶ則駄蘭
二谷中二専作を受合りつ牽立く躯て城外が牽ぎて其罪を責詈りて駄蘭二谷中二
専作を一個々々が誅るが先を斫落し足を斫落し胸を劈き肚大小腸を裂ぎ竟を

有種豪剛
夜忍岡の
城を拔く

撃落すに猶怨盡ざる壯客の悍く壯なる者毎に其尖を啖ふもありけり。検使則其首三級を梟首てもて遠近に示えしかば。観者日毎に堵の如く愉快とぞ稱えける。その時世智介梨夫婦并に穂北の隣村人の宇舎に疲労く病臥たる者毎に其疾病癒り果てぬ。道節則其村人に是を渡して皆其家に還ることを乞さるに。大家其再生の恩を拜ぎ喜悅の聲洋々と耳に盈く。民の父母とぞ稱えける。その日法印豪荊に有種道節明相清英に別を告て。直に安房に下總に猶落鮎と穂北人々の安眷に。野衲等ぞ一くに留るべくべく。身の暇を賜べとひたすら有種も道節も今さらに禁難く。則其意に任せめ。道節に只管に其軍功を譽ていふやう。和僧今番の挿に勇士も及ばざる所。真に寡君に受元上ぬ恩賞望の隨るべしと。其ときに豪荊是を受むにいなび然る望を廿人。落鮎に俗縁あり。義に仗る所已に深しと聊ぞ力を勠て為に怨を復たしのこ。其義に本意にいなむ暇稟けて身を起して一百有餘の黨類を咸召集へ。

俱して詣夾院村に還りしに。譽ある者多くなりける。是ぞ彼の後近郡近郷なる郷士豪民の善に與して。里見の德を慕ふ故に。道節が隊に附まく欲して。當城に住める者。日毎々に多かりけるが。道節が軍威いよく壯にして。一萬餘騎にぞ做りにける。當下有種は又道節に談ずるやう。當城は大人既に將として。印東荒川の勇士あり。且軍兵に選かるねが在下てに居ても要なり。汝に我穂北の壯い根り用谷中にて。是を別壯にして。家作苛めく建連ねうとぞいふなる。今這時に今寢さぞは孰の日をか俟べきぞ。明日は故郷人をねて那里に うち入りにいざ。敵尚殘居る者ありとも。獵場の獸に似たるべし。一個も漏さぞ撃捕りそ。と端を道節勇と一譽て其詐是に来るべし。遮莫敵を侮らば必や衍わらん我五百個の雄兵をもて和殿をを送らせん。戰飯軍用の錢財は當城内に多くあり。和殿の隨意なるべし。といふまく有種悅に堪ぞ遽く退出て。穂北人をに那義を告て。準備厨に整へ。次の日の早天に落鮎餘之と有種は小老二世智介梨人を及穂北人百四五十名と大山が加勢の軍兵

五百名と前後ふ立く。騎馬苛め九甲冑器械細ふ名狀きべ〻ば既ふ一と有種へ穂北の荘ふ近ぐく程ふ這里へ根角谷中二宅栗專作等の宅着の敵を避て在るもヨカリ。或ハ又那奸黨ふ諛媚て利を欲る莊客賈堅の家を作て居るも尠ラざりふ忍岡の城ハ有種ふ攻落されく谷中二專作ハ道節が隊ふ生捕られ竟ふ誅戮せられと伝知りて駭怕れ慌惑ひて逃去るく欲去て穂北の隣村人等追蒐く鋤秋釜をめて數多殺えーヨヨカリとど其事後ふ攻えるく然ば有種ハ於是重ねてまも濡さど故の莊園を拿復けるのこるーぢ谷中二ば建て倘新ーに廬舎多くあれば其身ハちゝ郷人們ふも分ち拿せつ膝を容るふ便りよけ三ば四年を歴て郷人を幾名欲下總後嶋の誼夾院遣をつ高荊并ふ子院る勇僧們ふヨヨく東西を贈つるどもて自他の宅着を召返せーば有種の妻重戸を首ふく郷人の母を戸老るハ杖ふ携て上るハ秋裏等笹などを搭駝ひ。稗子のまを掖ひて皆欲ひ帰ふ。然けれども穂北ハ猶敵地れば大山が加勢の五百名ハ弁が儘這頭ふ在陣て久くるまで成つるり。

曲亭翁口授編　一陽齋後豊國画

新局玉石童子訓

上帙五巻
下帙五巻　既發市

先逝る妻子一雫いかよりのか恋るて楽アモトハ

此遣ハ曩ふ曲亭翁著編近世説美少年録と標題して初編より二編ふ至る迄發販し並ぶく世評高ひ今昔無比の珎書へ因て雲顧看官後輯の發市と俟ものども故有て翁稿と脱ー賜らば爰ふ於て第三輯より下四輯と嗣支ハ漸く刊行の時と得て今年稿本成ふ及ぶ中絶既ふ年と經て最大う後れ〻ども書名と玉石童子訓と換られ〻り然れば本傳ハ美少年録の第四輯ふ是より不怠編へ嗣全部の結局ふ至る支近ふ在り巻を繙ひて題名のこと見聞ー事の譯と識めざる主顧君子ふ告る前編とひとく高評を賜らも本房の幸甚ーからんと

江戸大傳馬町二丁目　文溪堂丁子屋平兵衛謹白